

早朝。都心の喧騒を遥か下界に置き去りにした、超高層ビルの最上階。全面ガラス張りの壁の向こう側には、ミニチュアのように小さく見える街並みが無機質な幾何学模様を描いている。

この静寂と、冷徹なまでの機能美に満ちた社長室が、私の仕事場だ。

私はいつものように、佐久間社長が出社する三十分前にこの空間に入り、一切の淀みがないよう整えた。

（紅茶の抽出温度は九十五度。茶葉が最も香り立つ時間を計算済み。カップに注いだ瞬間に最適なアロマが広がるよう調整してある。デスク上のタブレットはフル充電、資料はミリ単位の狂いもなく平行。……よし、完璧だ）

秘書という職務において、感情はノイズでしかない。論理と効率こそが、この会社の急成長を支える私の武器なのだ。たとえ、この身体が人とは少し違う『カントボーイ』という特異なものであろうと、

仕事の能力に欠陥はない。

(そろそろだな……)

定刻。重厚な防音扉が音もなく開き、長身の影が滑り込んできた。

佐久間 爽英。二十代でこの帝国を築き上げたカリスマ。彼はラフな高級シャツの袖を無造作にまくり、圧倒的な存在感を放ちながらデスクへと歩み寄った。その唇には、常に相手を観察し、楽しむような微かな笑みが浮かんでいる。

「おはよう、旭真くん。……今日の紅茶、香りの立ち方がいいね。茶葉の配合を変えたかな？」

「おはようございます、佐久間社長。今朝の湿度と外気温を考慮し、抽出時間と茶葉の配分を微調整しました」

「いい判断だね。僕は君のそういう、理由のあるこだわり方が一等好きだよ」

窓から差し込む淡い光が、彼の端正な横顔を照らす。無駄のない輪郭に、均整の取れた目鼻立ち。だが、その切れ長の瞳は決して感情を映さない。ただ静かに、見る者の内側まで見透かすような鋭さを秘めている。

(……その辺の社員にも言っているくせに。いつかこの人に、心から気に入ってもらうことが、できたらな……)

佐久間社長は紅茶を一口啜ると、満足げに目を細め、一冊のファイルをデスクに置いた。

「さて、仕事の話进行しようか。この資料に目を通してくれ」

「はい。……これは、アダルト部門の四半期報告書……ですか？」

「そうだ。見ての通り、芳しくない」

「……そのようですね」

「特に期待されていた新型ローターの売上が、予測

を大幅に下回っている。これは我が社にとって、看過できない経営課題だ」

私は社長の放つ静かな圧に、背筋を正しながらデータをなぞった。

製品自体のクオリティは完璧なはずだ。洗練されたデザインに、肌に馴染む最高級のシリコン素材。

さらに、新型モーターによって、振動を五段階まで変えられる機能まで備えている。

(……論理的に考えれば、予測並みに売れてもいいはずなのに……。何が足りなかったんだ?)

とはいえ、私自身もこの製品を使ったことはない。

自社製品を買うのはどこか気恥ずかしいし、なにか道具を使うとしても、結局は他メーカーのものを選んでしまう。

「製品のスペックは完璧だ。でも、何かが欠けている。……何が足りないか、わかるかな？」

「……マーケティングがターゲット層の本音と乖離しているのでしょうか？」

「それもいいと思うけどね」

「では、何が？」

「欠けているのはね、実際の使用感に基づいた、顧客のレビューだ」

佐久間社長は不意に、デスクの引き出しから漆黒の小箱を取り出した。ベルベットのクッションに収められていたのは、滑らかな曲線を描く、宝石のように美しいピンク色のローターだった。

「そこでこれを、君に試してもらいたいんだ」

「……はい？」

「これは、さらにパワーアップした新型だ。旭真くんには今から新型のローターをテストしてもらって、レビューを考えてもらうよ」

「……そ、れは、開発チームのテスターに依頼すべき事項です。秘書の業務範疇ではありませんね」

即座に拒絶した。

しかし、彼は微塵も動じない。それどころか、面白くて仕方がないといった風に、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

こういう時の佐久間社長はひどく厄介だ。

「旭真くん。君は有能で、自分を律することに長けているカントボーイだ。そんな君が、このローターによって快樂を得ることができたら。それはきっと素晴らしいレビューになると思わないかい？」

「……馬鹿げた理論です。できません。そんな破廉恥なこと……っ」

「破廉恥？ 心外だよ」

佐久間社長は穏やかに笑いながら、獲物を追い詰める肉食獣のような足取りで私に近づいてくる。私はたまらず後ずさったが、すぐに冷たい壁に背中が当たった。逃げ場を塞がれ、彼の体温が伝わってくるほどの至近距離。

（近い、近い！時々この人は距離感がおかしいんだ……っ）

壁を叩くように彼の手が私の横に置かれた。彼の低い声が、私の耳元で囁かれた。

「これは低迷する事業を立て直し、会社の未来を守るための立派な『業務』だよ。旭真くんは、自分のちっぽけな感情を優先して、会社の損失を見過ごすようなこと、しないよね？」

「そ、それは……っ」

「もちろん、特別報酬はきちんと支給しよう。僕の最も近くにいて、僕の意図を完璧に汲み取れる有能な秘書である旭真くんに、やって欲しいんだ」

その鋭い双眸に見つめられると、蛇に睨まれた蛙のように、喉の奥が震えて声が出なくなる。ずるい。

そんな風に言われたら、私が断れるはずがないことを、この人は分かってやっているのだ。

「……お返事はどうかな？」

佐久間社長の指先が、私の顎をくい、と持ち上げた。強制的に視線を合わせられ、逃げることも許されない。

「……………は、い。……承知、いたしました。……佐久間社長」

絞り出すような私の答えに、彼は満足げに目を細めた。佐久間社長は小箱からピンク色のローターをつまみ上げ、私の目の前で弄んだ。

「いい子だね♡ では早速準備に入ろうか」

その言葉の意味を理解した瞬間、下腹部の奥がキュッと締まるような感覚に襲われた。

「さて……。まずはデータの精度を上げるための『準備』が必要だね。こっちに来てくれるかな？」

佐久間社長が手で示したのは、部屋の隅にある重厚な黒革の応接用ソファだった。仕方なく、私は言われたようにソファへと近づいた。

（けれど、本当に、今からここでやるのか……？
誰かが来たら……っ。でも、社長の『決定』は絶対だし、やるって言ったからな……）

ソファの沈み込むような感触が、余計に私の不安を煽った。佐久間社長は私のすぐ隣に腰を下ろした。

「緊張しているね。これだと正確なデータが取れないかもしれないな」

「そ、それは、こんな状況で緊張しないわけがありませんよ」

「そうだね。……では、どうしようか」

佐久間社長の長く節くれだった指先が、私のシャツの第一ボタンに掛かる。パチッ、と小さな音がして、ボタンが外されていく。

「佐久間社長……！」

「いいよ、そのままで。僕がリラックスさせてあげるから」

パチッ、パチッと、リズム良くシャツのボタンが弾かれていく。

胸元がはだけ、冷たい空気が肌を撫でるたびに、私は恥ずかしさで身を縮めた。けれど、彼の鋭い視線がそれを許さない。

「最初に準備をして、受け入れる態勢を作っておこう。……あれ、旭真くん、耳まで赤くなっているね？ これだけで恥ずかしくなっちゃったのかな？」

「……不本意な、状況なだけですよ」

シャツが左右に割れて脱がされ、残すはインナーだけだった。

「……美しい肌だね。赤い下着がよく映えそうだ。じっくり見ても飽きないかも」